

# 円内に数種類植樹

# 成長は自然任せに

## 森林再生新手法で

### 上越・柿崎の水源地



ススキの草原に直径3分の円を点々と作った植栽地。円内は「根返り穴」に見立て、表面の土や腐葉土を取って耕し、乾燥防止の木材チップを敷いてある。上越市柿崎区黒岩

上越市柿崎区黒岩の柿崎川ダム上流で、自然林の再生そのまゝの植栽法を使って水源の森を育てる活動が進んでいる。十月半ばには同市内の小学生らが参加し雑木苗の記念植樹が行われた。生態系の保全に十分配慮しコストも削減、県内初ともいわれる手法に注目が集まりそうだ。  
(上越支社・清水尚之)

### 小学生ら180人参加

- 苗木のコスト減少
- 間伐なくし省力化

この植栽方法は「生態学的混播・混植法」と呼ばれ、自然林で起きていた「根返り更新」を再現する手法。十五年ほど前に北海道で始まり、本州では群馬県などで実績を上げてきているという。「根返り更新」とは自然林の中で大木が根を張り倒れてきた空き地を再び木が育つ条件を整えていくという。雑草や害虫、競争相手の植物が少なくなるため、成長が速く、最終的に一本が残りやすいという発想だ。



円内にはコナラやケヤキなどの雑木を15本混植。児童一人が1カ所を担当し、家族や地域の大人たちと一緒に小さな苗木を植え付けていった。

現地周辺でドングリなど木の実を採集して発芽させ、学校や家庭で植栽用の苗木として育ててきた。約三十軒の植栽地は同市のくびきの森林組合が事前に八日間かけて整地。約三分の二に直径三分の円内を耕し、雑草の繁茂と乾燥を防ぐための木材チップをかぶせて八十の植栽区域(ユニット)を準備した。記念植樹には高田西小六年生、北諏訪小五年生に保護者や地元住民ら合わせて約百八十人が参加した。一人の児童が一つのユニットを担当。三十軒ほどに育ったコナラやケヤキなど七種類の木を十五本植え、数種類の木の種子をまいていった。児童らは「何年で立派な林になるかな」と、張り切って作業していた。

用材林や治山林など人工林の植栽は高さ五十センチほどに二、三年かけて育てた苗木を二層前後の間隔で整然と植えるのが一般的。植えた苗木すべてを育てるのが前提で、成長とともに込み合ってきたら間伐していく。

「混播・混植法」は苗木は一年程度育てたものでよく、全面には植えない。この植栽法を採用。二

同ダムを管理している上越地域水道用水供給企業団(企業長・木浦正幸)は専門家の指導を受け、苗木を直接まくことが、その後一時放牧に利用されたり、ダム建設用の土砂が採取されたりし、苗木の生育に支障をきたしていた。植栽計画が決まった一年前から、同市の高田西小学校、北諏訪小学校が総合学習で参加。児童は「

